

図10: エンジニアリングが持つダイナミズムからの疎外の結果1(抑圧と反抗)(2)

#10.6

to #10.5

S1を失墜させることができない状況における主人のディスクール:

- ・ 確立されたS1から新たに規定されるS2が枯渇してしまっているため、新しい未既定の領域が眼前に現れない限り、(通常は)主人のディスクールが発生しなくなる。
- ・ ただし、分析家のディスクールを経て、新たな視点 (=S1) に基づく世界解釈の可能性を発見した場合、そのS1に基づいた世界の再解釈が行われるようになることがある(それが端的に新奇な解釈であることもあるが、実際の社会のあり方にそぐわない妄想的な解釈であることもある)。

#10.7

S1を失墜させることができない状況における大学のディスクール:

- ・ 大学のディスクールはS1の失墜を試みないため、この状況下において大学のディスクールは最も適合的なスタンスとなる。
- ・ ただし、社会に適合的であることと不満 (=a) が解消されることは別である。
- ・ 他のディスクールに移ることを十分に学ばないまま身を持ち崩して大学のディスクールの中で評価されない周縁 (=a) に追いやられた場合、大学のディスクールにおける自己滅却的な主体 (=a/\$) (=S1/\$) は破滅的な選択肢を取るかもしれない。

#10.8

S1を失墜させることができない状況における

ヒステリー者のディスクール:

- ・ ヒステリー者のディスクールは、S1により提供されるS2が主体の不満 (=a/\$) を満足させられないことを明らかにするが、それにも関わらずS1を失墜させることができないため、不満を抱えたままの状態に置かれる。
- ・ 不満を持っている者同士が集まることもあるが、ヒステリー者のディスクールは新たなS1を打ち立てるものでもないため、不満を持つ者の集団から秩序が生まれることもない。

#10.9

S1を失墜させることができない状況における分析家のディスクール:

- ・ 分析家のディスクールでは、うまくいかなさ (=a) を抱えた本人にそのうまくいかなさを解消するS1を生み出させる (=a→\$/\$S1) ことで、本人なりの新しい世界解釈を生み出す結果につながらなければならない(社会のS1を失墜させることができない状況下では、社会のあり方を変えること自体は困難なままである)。